2024年10月号

合同 No.４８６

「福音宣教への熱い思い
～トルコ旅行で教えられたこと～」

日本キリスト合同教会教師
大井　満

「その夜、パウロは幻を見た。その中で一人のマケドニア人が立って、『マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください』と言ってパウロに願った」（使徒言行録１６章９節）。

去る３月、お茶の水聖書学院（ＯＢＩ）に後援していただいて、「パウロの足跡と黙示録の七つの教会を辿る聖書の世界へ」と題したトルコへの旅を実施しました。わたし自身は同行解説者として参加し、妻の百合江も参加しました。参加者はクリスチャン８名でしたが、旅行会社の添乗員二人（一人は研修を兼ねて）、トルコ人の日本語ガイド（この方はムスリム）も加わって、親しい交わりを深めつつ、よい聖書の学びの旅となりました。

意外に感じる方が多いかも知れませんが、トルコは実に聖書の世界です。もちろん現在はモスクが林立し、イスラム教の祈りの声が響き渡る世界ではあるのですが、旧新約聖書に深く関連する土地です。何よりも旅行のタイトルが表すように、パウロの伝道旅行は、シリアのアンティオキアからトロアスに至るまで、つまりヨーロッパに福音が伝えられる以前は、すべて今日のトルコ国内に位置しています。ヨハネの黙示録２章と３章に記されている七つの教会も然りです。

もちろん現在のトルコに、聖書の時代の建物が残っているわけではありません。トルコは日本と同じように地震の多い国ですから、紀元１世紀の建物などはほとんど破壊され、瓦礫の下に埋もれています。考古学的な発掘作業は現在進行形で、今も進められています。

今回の旅行を通して学んだことは多岐にわたります。その中から、宣教に対するパウロの情熱ということを取り上げます。

旅の三日目、わたしたちはイスタンブルからコンヤ（聖書のイコニオン。使徒言行録１３章５１節、１４章１節～５節）へと、国内線の飛行機で移動しました。このコンヤからバスで約２時間移動したところに、ピシディアのアンティオキア（現代のヤルバチの郊外）の遺跡があります。ここから地中海沿いの港町であるアタリア（今日のアンタルヤ）へと、さらにバスで移動するのですが、直線距離で約２００キロメートル。標高差およそ１，０００メートルを、バスはひたすら下っていきます。快適なハイウェイでした。場所によっては桃の花が咲き誇っていました。

しかしパウロたちは第１次伝道旅行において、この道を、わたしたちとは逆に、徒歩で上ってきたのです。「それから、二人はピシディア州を通り、パンフィリア州に至り、ペルゲで御言葉を語った後、アタリアに下り、そこからアンティオキアへ向かって船出した」（使徒言行録１４章２４節～２６節）。ちなみに「アンティオキア」とあるのは、シリアのアンティオキアのことです。

その後パウロは第２次伝道旅行に出かけ、やがてトロアスでマケドニア人の幻を見たことで、エーゲ海を渡って福音がヨーロッパに伝えられました。今、トロアスの遺跡は、忘れられたかのようにひっそりとたたずんでいます。１０年ほど前までは、「トロアスに行きたい」とトルコの旅行代理店に伝えても、有名なトロイに連れて行かれたほどだそうです。今でも、訪れる人もわずかなのでしょう。街道沿いから小さな踏み跡を見つけて分け入っていくのです。そしてパウロたちが船出したであろう海岸には、穏やかに波が寄せていました。

「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか」（イザヤ書６章８節）と、神はイザヤに語りかけられました。同じ神はパウロに伝道の熱い思いを与えてくださいました。神は、「マケドニア州に渡って来て、わたしたちを助けてください」と、幻の中でマケドニア人を用いてパウロに語りかけられたのです。このことを聞いた第二次伝道旅行の同行者たちは、「わたしたちはすぐにマケドニアへ向けて出発することにした」と決断しました（使徒言行録１６章１０節）。

神は今、わたしたちにも同じように語りかけておられます。「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」（イザヤ書６章８節）と、答えるのはだれでしょうか。